千葉 拓也（数学教育コース）

「教えない」教師

１．教育を考える一言

本当に優れている教師は、「教えない」教師だ

２．背景

これは、友人と優れた教師の条件について何気なく話をしていた時に、友人が発したことばです。最初はこのことばの意味が腑に落ちませんでしたが、話を聞くうちに、このことばが教育の本質を見事に捉えていることに気づかされました。その本質とは、「社会において必要な知識や経験を教師が与えているだけでは、それを教育とは呼ばない。教師の働きかけによって、子どもに自分の力だけでできた、と思わせること。」である、と彼は説明してくれました。これが「教育」を考える契機となった出来事です。なお、ここでいう教師は教員（teacher）の意よりは師匠・指導者（mentor）の意に近いとすることにします。

３．考察

教育とは教え育むと書くにも関わらず、なぜ「教えない」ことが優れているのか。

長年に渡って日本の国語教育に尽力した大村はま先生は、著書『教えるということ』の中で次のように述べています。「とにかく子どもが私の手から離れて、一本立ちになった時に、どういうふうにして人間として生きていけるかという、その一人で生きていく力をたくさん身につけ」させることが、教師の使命である。つまり、教育者たるもの、子どもが社会においてひとりで生きていく力を身につけさせてやらないと、駄目なのです。また、スウェーデンの教育思想家であるエレン・ケイ(1979)もまた、教育について「教育の最大の秘訣は、教育せざることである」と述べています。

では、具体的に教師が教えないことで子どものどのような力が育まれるのか。その答えは「社会の中で自ら問題解決を行う力と、それを行う自信」であると考えます。人生は問題解決の連続です。どうやったら数学ができるようになるか、どうやったら野球がうまくなるか、どうやったら友達ができるか、どうやったら好きな人に好意をもってもらえるか等、人生の問題は無数にありますが、誰しもが最初は解決方法を知らないし、経験を積んだとしても見つけられないことは多くあります。それらの解決を、あたかも子どもが自分で行ったかのように思えるように、教師は全てを教えたり与えたりせず、支援や助言、周辺環境の整備を行うのです。これによって、子どもが問題解決を行い、最終的に「自分自身の力で困難を克服できた」と感じることができれば、問題解決能力とともに、それを行う自信をつけることができます。以上を実践できる教育者が、真の教師なのです。

引用・参考文献

エレン・ケイ著、小野寺百合子訳『児童の世紀』 冨山房百科文庫 24、1979 年

大村はま『教えるということ』共分社、1973 年